

電車内痴漢の分類とその特徴 —新聞報道を用いた探索的分析—

社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程2年

大高 実奈

要旨

本研究では、電車内での痴漢事件に関する新聞記事を208件分収集し、痴漢事件の内容を分析した。単純集計の結果、収集された電車内痴漢事件のうち、加害者には公務員の男性が多く、被害者には中学生や高校生の少女が多かった。また、ほとんどが平日の朝や夜の時間帯に発生していた。多重対応分析とクラスター分析の結果、平日や朝といった電車の混雑する時間帯に発生する「混雑型」の痴漢事件と、電車の空いている時に発生する「非混雑型」の痴漢事件に分類できた。「混雑型」は、朝のラッシュなどに多く発生し、中学生や高校生の被害者が多かった。「非混雑型」は夜の帰宅ラッシュ時によく発生し、40代の警察官などの公務員や国家公務員の加害者、20代の会社員等や無職の被害者が多かった。

1. 問題と目的

1-1. 痴漢と法律

日本において日常的に発生している性犯罪として「痴漢」が挙げられる。「痴漢」という罪名は日本の刑法典にはなく、その行為の多くは迷惑防止条例違反や強制わいせつ罪に該当する(野村他, 2012)。大阪府警察(2020a)によると、大阪府公衆に著しく迷惑をかける暴力的不良行為等の防止に関する条例で定める卑わいな行為について、公共の場所で「衣服等の上から、直接人の体を触る」という行為が「ちかん」とであるとされている。また、列車内では、「下半身を、押しつけられる」、「いやらしい言葉を言われたり、いやらしい行為を見せつけられる」など、恥ずかしい思いをさせられたり、不安を感じさせる行為もちかん行為として取り締まっている。この条例の「卑わいな行為」として検挙されたうちの半数が「衣服等の上から、直接人の体を触る」という「ちかん」行為である(大阪府警察, 2020b)。

犯罪の認知件数や検挙人数については、警察庁の発表する「警察白書」や法務省の発表する「犯罪白書」を見ると全国的な統計が載っている。しかし、痴漢は多くの場合で各都道府

県の迷惑防止条例違反に該当し、条例違反の場合は刑法犯ではなく特別法犯として扱われるため、犯罪白書の統計には記載されないことが多く、全容を把握することができない(原田, 2019)。また、被害者が駅員や警察に被害を打ち明けたとしても、鉄道会社では「乗客同士のトラブル」として処理され、警察に行ったとしても、正式な被害届を提出するなどの手続きを踏んでいなければ、「相談事」として受理され、犯罪統計には計上されない(牧野, 2019)。このように、痴漢に関する統計データとして公表されるものは、数多い発生件数のうち、運よく警察に認知された事件のみであり、氷山の一角に過ぎない。

1-2. 痴漢と鉄道

日本の都市部では電車は極めて混雑している。国土交通省(2018)によると、平成29年度の日本の三大都市主要区間の鉄道の平均混雑率は、東京圏163%、大阪圏125%、名古屋圏131%である。これらは、各区分について1日の中で最も混雑している1時間の平均の混雑度を算出したものである。混雑率の目安はTable 1に示す通りである。昭和50年度の平均混雑率は、東京圏221%、大阪圏199%、名古屋圏205%と現在よりもはるかに高かったが、編成車両数や運行本数の増加によって鉄道の旅客運送力を上げたことにより、平成10年頃から平成20年頃までには、現在の混雑率と同程度まで軽減した。以降は輸送人員も緩やかに減少し、現在まで混雑率はほとんど横ばいで推移している。しかし、現在も決して電車の混雑が解消されているとは言い難い。運送政策審議会(2000)は、「東京圏における高速鉄道を中心とする交通網の整備に関する基本計画について」という答申において、2015年の東京圏の平均混雑率を150%とすることが目標として掲げられていたが、この目標は2020年現在でもいまだに達成されていない。また、この目標が達成できていないことから、交通政策審議会(2016)は「東京圏における今後の都市鉄道のあり方について」という答申において、今後対応すべき課題の一つ目に「混雑の緩和」を挙げている。

Table 1 混雑率の目安(国土交通省(2018)による)

混雑率	目安
100%	店員乗車(席につくか、吊革につかまるか、ドア付近の柱につかまることができる)。
150%	広げて楽に新聞を読める。
180%	折りたたむなど無理をすれば新聞を読める。
200%	体がふれあい相当圧迫感があるが、週刊誌程度なら何とか読める。
250%	電車がゆれるたびに体が斜めになって身動きができず、手も動かせない。

国土交通省(2004)によると、平成22年の1日平均の鉄道利用者に占める定期券の利用者数について、首都圏は約63%、中京圏は約62%、近畿圏は約56%が定期券利用者であり、多く

の通勤・通学利用者がそれぞれの地域の郊外から中心部へと移動している。通勤や通学で日常的に電車を利用している女性の多くが、電車内で痴漢被害に遭った経験を有する。痴漢の被害は電車内以外にも路上や商業施設内など様々な場所で発生しうるものであるが、電車の混雑する都市部では、発生場所の内訳の多くが電車内である。警視庁(2020)によると、2019年度中に認知した東京都内の痴漢(迷惑防止条例違反)事件のうち、45%が電車内、19%が駅構内で発生していた。電車内での痴漢が多いのは東京都やその周辺の首都圏のみではない。一般市民の女性を対象とした痴漢被害の調査として、鈴木(2000)は愛知県内市部に居住する18~29歳の女性600人を対象に過去3年以内の痴漢被害についての質問紙調査を行っている。その結果、33.7%の女性が過去3年以内に痴漢に遭っており、被害場所については電車・バス等の中が66.5%、駅構内が3.8%を占めていた。また、岡部(2005)は、福岡県久留米市の西鉄久留米駅の構内において、女性客に対し聞き取り調査などを行った。その結果、回答者中28.4%の女性が過去1年以内に電車内で痴漢の被害に遭っていた。東京都における調査として、大高(2017)は都内の大学生を対象に電車内での痴漢被害に関する調査を行っており、女子学生の37.4%、男子学生においても6.0%が被害経験を有することがわかっている。

電車内での痴漢が多いことは日本の性犯罪の特徴であるが、近年、アジア圏をはじめとする諸外国においても同様の電車内痴漢が報告されることがある。岩井(2017)は台湾出身の留学生の女性の新聞への寄稿を紹介している。また、遠山(2018)は中国・香港・台湾における公共交通機関内での痴漢に対する反対運動や調査結果について紹介している。それぞれの国・地域の調査において、中国では2017年の調査で27%の女性が過去2年以内に公共交通機関内で痴漢に遭ったと回答しており、香港の2007年の調査では17.6%の女性が過去1年以内に交通機関で痴漢に遭っていた。台湾では2007年に新聞が報じた公共交通機関での性暴力について集計しており、台北メトロという鉄道内で16件の被害が報告されており、バスよりも多かった。このように、電車内での痴漢はもはや日本国内のみの問題ではない。

1-3. 電車内痴漢の暗数化

このように、多くの女性が電車内で痴漢の被害に遭っているにもかかわらず、その被害申告率は非常に低い。先述の調査の結果、警察に届けを出した割合は、鈴木(2000)で3.9%、岡部(2005)で2.1%であった。実際の被害総数のうち、警察に届けられる被害はごく一部であることがわかる。さらに、その中でも被害届として事件受理されるもの、捜査が進んで犯人を検挙でき、犯罪件数として発表されるに至るものは、被害総数のほんの一部であることが窺える。痴漢被害に遭ったことのある人からの被害経験の聴取では、上述のような暗数となった多くの被害についても知ることができるほか、被害に遭った状況や被害内容などについても詳細に聴取できる。その一方で、犯人に対する情報については、被害者からはほとんど聴取することができない。極度の恐怖感により犯人の方を見ることができないことや、異

常な混雑状況によりそもそも誰が犯人であるか明確に確認できないことなどが要因となり、被害時の犯人情報の収集を低下させているためである。仮に、犯人が正確に特定できていたとしても、電車でたまたま乗り合わせただけの人物の外見のみからでは、正確な年齢や職業などは把握できない。

1-4. 本研究の目的

本研究では、電車内痴漢事件の新聞記事の内容を分析することで、被害経験者に対する被害についての聴取からは得られない加害者の特性も含め、電車内痴漢事件の概要について検討する。また、本研究で得られた結果を、被害経験者から聴取された被害内容や、警察庁や法務省の発表にある統計とも比較することで、暗数化された被害の概要や、新聞報道されていない認知事件の概要との違いについても検討する。

2. 方法

本研究では、中日新聞・東京新聞記事データベースを利用し、データベース検索が可能となっている1987年4月1日から2020年7月31日までの新聞記事について「痴漢 電車」のキーワードで記事を検索、収集した。なお今回、アクセス可能で詳細のわかるデータベースがこれら2つの新聞社のみであったことから、他社の記事は分析資料として取り扱わなかった。よって、本研究は限定された地域に対する探索的なものである。検索結果は中日新聞で464件、東京新聞で862件の合計1326件であったが、痴漢防止運動に関する記事やコラム記事を除き、具体的な電車内痴漢事件について記載された記事のみを収集した。収集された記事のうち、東京都近郊もしくは愛知県近郊で発生し、被疑者が判明しており、十分な事件概要の記載された事件208件分の新聞記事を分析対象とした。具体的に、①被疑者の年齢が記載されている、②痴漢の発生日が記載されている、③痴漢行為の内容について明記されている、の3つの基準を満たす記事を分析に用いた。また、加害者が女性である事件の記事は収集されなかったが、被害者が男性である事件については件数が少なかったため分析対象から除外し、加害者が男性、被害者が女性である事件のみを対象とした。被疑者の認否については、記載している記事も多かったが、新聞掲載時から変容することもあり、最終的な認否であるか判然としないため、本研究では分析の対象外とした。

3. 結果

3-1. 単純集計とクロス集計

収集された記事から、加害者と被害者それぞれの年代と職業、発生日の曜日と時間帯（朝：始発～9:59、昼～夕方：10:00～17:59、夜：18:00～終電）、被害内容（触られた体の部位、体を触る以外の痴漢行為）、被疑者逮捕時の罪名（強制わいせつ等、迷惑防止条例等）

について集計した。午前0時から終電までの間に発生した事件については、前日の電車運行時間中の発生と考え、前日の曜日に算入した。加害者や被害者の職業、被害者の年代、被害発生時間帯、被害内容、逮捕時の罪名については記載のない記事もあり、被害内容については同一の事件で複数の痴漢行為を行っているものもあった。被害者に関する情報については、年代の記載がなく、職業について中学生もしくは高校生と記載されていた記事については年代は「10代」として集計し、職業についての記載はないが年齢が13～14歳であった記事については、職業は中学生として集計した。分析にはHAD (清水, 2016) を使用した。

3-1-1. 加害者の年代・職業

加害者の年代は208件の記事全てに記載されており、30代が30.77%と最も多く、次いで40代が25.48%、20代と50代がそれぞれ18.27%であった (Table 2)。加害者の職業は208件中203件に記載されていた。「自衛官」「消防署員」「警察官」は体力を重視される公務員として「警察等」とまとめた。「会社員等」には「会社員」と記載されていたもの以外にも、具体的な企業名が記されていたものや「団体職員」なども含む。「その他」には「工員・作業員」「派遣・アルバイト」など非正規雇用の職業や「マッサージ師」などの職業を含む。警察等が21.18%、地方公務員が12.32%、国家公務員が11.82%を占め、教員なども含めると公務員が半数以上を占めていた。会社員等は25.12%であり、中学生や高校生、大学生などの学生の加害者も4.43%いた (Table 3)。また、各年代における職業別の割合をクロス集計表 (Table 4) に示し、 χ^2 検定を行った ($\chi^2(35) = 142.01, p < .001, \text{Cramer's } V = .374$)。残差分析の結果より、10代では学生が多く、60代以上では無職が多く、30代ではその他の職業が多かった。

Table 2 加害者の年代

	加害者年代						合計
	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	
度数	8	38	64	53	38	7	208
	3.85%	18.27%	30.77%	25.48%	18.27%	3.37%	100.00%

Table 3 加害者の職業

	加害者職業								合計
	警察等	国家公務員	地方公務員	教員	会社員等	その他	学生	無職	
度数	43	24	25	14	51	23	9	14	203
	21.18%	11.82%	12.32%	6.90%	25.12%	11.33%	4.43%	6.90%	100.00%

Table 4 加害者の年代と職業

		加害者職業							合計	
		警察等	国家公務員	地方公務員	教員	会社員等	その他	学生		無職
10代	度数	0	0	0	0	1	1	6 ***	0	8
	全体に占める割合	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.49%	0.49%	2.96%	0.00%	3.94%
	調整済み標準化残差	-1.496	-1.057	-1.082	-0.785	-0.840	0.107	9.893	-0.785	
20代	度数	5	5	5	2	14 +	2	3	2	38
	全体に占める割合	2.46%	2.46%	2.46%	0.99%	6.90%	0.99%	1.48%	0.99%	18.72%
	調整済み標準化残差	-1.343	0.283	0.175	-0.441	1.847	-1.309	1.150	-0.441	
30代	度数	13	6	7	5	15	13 **	0 *	2	61
	全体に占める割合	6.40%	2.96%	3.45%	2.46%	7.39%	6.40%	0.00%	0.99%	30.05%
	調整済み標準化残差	0.030	-0.575	-0.239	0.479	-0.115	2.941	-2.011	-1.333	
40代	度数	14	9	5	5	13	4	0	2	52
	全体に占める割合	6.90%	4.43%	2.46%	2.46%	6.40%	1.97%	0.00%	0.99%	25.62%
	調整済み標準化残差	1.175	1.420	-0.687	0.897	-0.024	-0.960	-1.801	-1.007	
50代	度数	10	3	8 +	2	7	2	0 +	5 +	37
	全体に占める割合	4.93%	1.48%	3.94%	0.99%	3.45%	0.99%	0.00%	2.46%	18.23%
	調整済み標準化残差	0.962	-0.774	1.905	-0.396	-0.962	-1.257	-1.449	1.757	
60代以上	度数	1	1	0	0	1	1	0	3 ***	7
	全体に占める割合	0.49%	0.49%	0.00%	0.00%	0.49%	0.49%	0.00%	1.48%	3.45%
	調整済み標準化残差	-0.454	0.205	-1.009	-0.733	-0.673	0.251	-0.580	3.821	
合計	度数	43	24	25	14	51	23	9	14	203
	全体に占める割合	21.18%	11.82%	12.32%	6.90%	25.12%	11.33%	4.43%	6.90%	100.00%

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

3-1-2. 被害者の年代・職業

被害者の年代は208件中203件に記載されており、10代が49.26%、20代が40.39%と多かった (Table 5)。被害者の職業は173件に記載されており、中学・高校生が47.40%、四年制の大学や短期大学、専門学校等の学生が13.29%、会社員や公務員などの会社員等が28.32%であった (Table 6)。各年代における職業別の割合をクロス集計表 (Table 7) にまとめ、 χ^2 検定を行った ($\chi^2(15) = 175.52, p < .001, \text{Cramer's } V = .590$)。残差分析の結果より、10代では中学生や高校生が多く、会社員等、バイトや派遣、無職、大学等の学生は少なかった。20代は大学や専門学校の学生や会社員等、無職が多かった。30代は会社員等やバイト・派遣が多かった。40代以上は会社員等が多かった。

Table 5 被害者の年代

	被害者年代				合計
	10代	20代	30代	40代以上	
度数	100	82	18	3	203
	49.26%	40.39%	8.87%	1.48%	100.00%

Table 6 被害者の職業

	被害者職業						合計
	中学・高校生	大学・専門	会社員等	バイト・派遣	その他	無職	
度数	82	23	49	9	6	4	173
	47.40%	13.29%	28.32%	5.20%	3.47%	2.31%	100.00%

Table 7 被害者の年代と職業

		被害者職業						合計
		中学・高校生	大学・専門	会社員等	バイト・派遣	その他	無職	
10代	度数	82 ***	7 *	2 ***	1 *	1	1 *	94
	全体に占める割合	48.81%	4.17%	1.19%	0.60%	0.60%	0.60%	55.95%
	調整済み標準化残差	11.230	-2.232	-8.273	-2.785	-1.262	-1.974	
20代	度数	0 ***	14 ***	34 ***	2	3 +	5 *	58
	全体に占める割合	0.00%	8.33%	20.24%	1.19%	1.79%	2.98%	34.52%
	調整済み標準化残差	-9.190	3.312	6.594	-0.798	1.723	2.561	
30代	度数	0 ***	0	8 ***	6 ***	0	0	14
	全体に占める割合	0.00%	0.00%	4.76%	3.57%	0.00%	0.00%	8.33%
	調整済み標準化残差	-3.816	-1.477	2.608	6.508	-0.610	-0.752	
40代以上	度数	0	0	2 *	0	0	0	2
	全体に占める割合	0.00%	0.00%	1.19%	0.00%	0.00%	0.00%	1.19%
	調整済み標準化残差	-1.389	-0.538	2.317	-0.338	-0.222	-0.274	
合計	度数	82	21	46	9	4	6	168
	全体に占める割合	48.81%	12.50%	27.38%	5.36%	2.38%	3.57%	100.00%

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

3-1-3. 痴漢行為の内容

痴漢行為の内容について、208件中192件で「体を触る」という行為が行われており、そうち触られた体の部位について記載がないものは47件であった。触られた部位の記載があったもののうちでは、下半身、尻、太もも、胸が多かった (Table 8)。体を触る以外の痴漢行為内容としては、「スカートの中に手を入れる」行為、「下半身や脚を押し付ける」行為などがあった。なお、複数の体の部位を触った事件や、複数の行為が行われた事件もあり、同一の事件で複数の痴漢行為が行われた事件については、当該の行為内容全てに算入して度数を算出した。そのため、合計件数が全体の事件数を超える220件となっている。

Table 8 痴漢行為の内容

	痴漢行為										合計
	体を触る								押し付け	スカートに 手を入れる	
	下半身	尻	太もも	脚・膝	腹部・腰	胸	腕・手	記載なし			
度数	46	39	25	7	8	20	4	47	9	15	220
	20.91%	17.73%	11.36%	3.18%	3.64%	9.09%	1.82%	21.36%	4.09%	6.82%	100.00%

3-1-4. 痴漢の発生日時

痴漢の発生日時について、発生日は208件中全件に記載されており、時間帯は206件に記載されていた。痴漢行為が数分以上にわたって続き、本研究の時間帯区分をまたいで発生している事件については、痴漢行為が開始された時刻を基準として集計した。発生日の曜日 (Table 9) について、土日を除いた月曜日から金曜日が全体の約9割を占めた。平日の曜日別に見ると、月曜日が35件であり、火曜日は24件、水曜日31件、木曜日45件、金曜日52件と、火曜日以降は週末に近い曜日において件数が多かった。発生時間帯 (Table 10) について、通勤・通学ラッシュの時間帯に該当する始発～9:59の時間帯が全体の50.97%、帰宅ラッシュの

時間帯に該当する18:00～終電の時間帯が42.23%であった。各曜日における各時間帯の割合をクロス集計表 (Table 11) にまとめ、 χ^2 検定を行った ($\chi^2(12) = 24.395, p < .05, \text{Cramer's } V = .243$)。残差分析の結果より、土曜日は始発～9:59までの時間帯の発生が少なく、18:00～終電の時間帯の発生が多かった。日曜日は10:00～17:59の時間帯の発生が多かった。

Table 9 痴漢発生の曜日

	曜日							合計
	月	火	水	木	金	土	日	
度数	35	24	31	45	52	13	8	208
	16.83%	11.54%	14.90%	21.63%	25.00%	6.25%	3.85%	100.00%

Table 10 痴漢発生の時間帯

	時間帯			
	～9:59	10:00～17:59	18:00～	合計
度数	105	14	87	206
	50.97%	6.80%	42.23%	100.00%

Table 11 痴漢の曜日と時間帯

		時間帯			
		～9:59	10:00～17:59	18:00～	合計
曜日	度数	17	3	15	35
	全体に占める割合	8.25%	1.46%	7.28%	16.99%
	調整済み標準化残差	-0.312	0.458	0.082	
	度数	15	1	8	24
	全体に占める割合	7.28%	0.49%	3.88%	11.65%
	調整済み標準化残差	1.202	-0.545	-0.939	
	度数	17	3	11	31
	全体に占める割合	8.25%	1.46%	5.34%	15.05%
	調整済み標準化残差	0.467	0.692	-0.825	
	度数	25	2	17	44
	全体に占める割合	12.14%	0.97%	8.25%	21.36%
	調整済み標準化残差	0.875	-0.669	-0.545	
	度数	27	2	23	52
	全体に占める割合	13.11%	0.97%	11.17%	25.24%
	調整済み標準化残差	0.159	-0.978	0.337	
	度数	2 *	0	10 **	12
	全体に占める割合	0.97%	0.00%	4.85%	5.83%
	調整済み標準化残差	-2.450	-0.964	2.970	
	度数	2	3 ***	3	8
	全体に占める割合	0.97%	1.46%	1.46%	3.88%
	調整済み標準化残差	-1.499	3.520	-0.276	
合計	度数	105	14	87	206
	全体に占める割合	50.97%	6.80%	42.23%	100.00%

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

3-1-5. 加害者の年代・職業と犯行時間帯

痴漢の加害者の年代・職業と犯行時間帯のクロス集計表をTable 12に示した。痴漢の加害者の年代と時間帯 ($\chi^2(10) = 18.959, p < .05, \text{Cramer's } V = .215$) についての残差分析の結果

より、10代の加害者は始発～9:59の時間帯の犯行が多く、18:00～終電の時間帯の犯行が少なかった。30代は10:00～17:59の時間帯の犯行が多く、60代以上は始発～9:59の時間帯の犯行が少なかった。痴漢の加害者の職業と時間帯 ($\chi^2(14) = 41.441, p < .001, \text{Cramer's } V = .321$) についての残差分析の結果より、警察等の加害者では始発～9:59の時間帯の犯行が少なく、18:00～終電の時間帯の犯行が多かった。地方公務員の加害者では始発～9:59の時間帯の犯行が多かった。無職の加害者では始発～9:59の時間帯の犯行が少なく、10:00～17:59の時間帯の犯行が多かった。

Table 12 加害者の年代・職業と犯行時間帯

		時間帯				
		～9:59	10:00～17:59	18:00～	合計	
加害者年代	10代	度数	7 *	1	0 *	8
		全体に占める割合	3.40%	0.49%	0.00%	3.88%
		調整済み標準化残差	2.108	0.654	-2.467	
	20代	度数	24	1	13	38
		全体に占める割合	11.65%	0.49%	6.31%	18.45%
		調整済み標準化残差	1.664	-1.130	-1.109	
	30代	度数	30	8 *	26	64
		全体に占める割合	14.56%	3.88%	12.62%	31.07%
		調整済み標準化残差	-0.789	2.184	-0.314	
	40代	度数	27	2	23	52
		全体に占める割合	13.11%	0.97%	11.17%	25.24%
		調整済み標準化残差	0.159	-0.978	0.337	
	50代	度数	16	1	20	37
		全体に占める割合	7.77%	0.49%	9.71%	17.96%
		調整済み標準化残差	-1.038	-1.092	1.607	
	60代以上	度数	1 *	1	5	7
		全体に占める割合	0.49%	0.49%	2.43%	3.40%
		調整済み標準化残差	-1.975	0.801	1.591	
合計	度数	105	14	87	206	
	全体に占める割合	50.97%	6.80%	42.23%	100.00%	
加害者職業	警察等	度数	14 **	1	27 ***	42
		全体に占める割合	6.97%	0.50%	13.43%	20.90%
		調整済み標準化残差	-2.758	-1.312	3.483	
	国家公務員	度数	9	1	14	24
		全体に占める割合	4.48%	0.50%	6.97%	11.94%
		調整済み標準化残差	-1.540	-0.574	1.863	
	地方公務員	度数	17 +	1	6	24
		全体に占める割合	8.46%	0.50%	2.99%	11.94%
		調整済み標準化残差	1.943	-0.574	-1.678	
	教員	度数	8	1	5	14
		全体に占める割合	3.98%	0.50%	2.49%	6.97%
		調整済み標準化残差	0.381	0.027	-0.401	
	会社員等	度数	37 ***	3	11 **	51
		全体に占める割合	18.41%	1.49%	5.47%	25.37%
		調整済み標準化残差	3.361	-0.352	-3.234	
	その他	度数	10	3	10	23
		全体に占める割合	4.98%	1.49%	4.98%	11.44%
		調整済み標準化残差	-0.894	1.217	0.278	
学生	度数	7	0	2	9	
	全体に占める割合	3.48%	0.00%	1.00%	4.48%	
	調整済み標準化残差	1.569	-0.840	-1.160		
無職	度数	3 *	4 **	7	14	
	全体に占める割合	1.49%	1.99%	3.48%	6.97%	
	調整済み標準化残差	-2.393	3.293	0.726		
合計	度数	105	14	82	201	
	全体に占める割合	52.24%	6.97%	40.80%	100.00%	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

3-1-6. 被害者の年代・職業と被害時間帯

被害者の年代・職業と痴漢の被害時間帯のクロス集計表をTable 13に示した。痴漢の被害者の年代と時間帯 ($\chi^2(6) = 21.065, p < .01, \text{Cramer's } V = .229$) についての残差分析の結果より、10代の被害者では始発～9:59の時間帯の被害が多く、18:00～終電の時間帯の被害が少なかった。20代では始発～9:59の時間帯の被害が少なく、18:00～終電の時間帯の被害が多かった。30代では始発～9:59の時間帯の被害が少なかった。痴漢の被害者の職業と時間帯 ($\chi^2(10) = 28.714, p < .001, \text{Cramer's } V = .289$) についての残差分析の結果より、中学・高校生の被害者では始発～9:59の時間帯の被害が多く、18:00～終電の時間帯の被害が少なかった。会社員等の被害者では始発～9:59の時間帯の被害が少なく、18:00～終電の時間帯の被害が多かった。

Table 13 被害者の年代・職業と被害時間帯

		時間帯			合計	
		～9:59	10:00～17:59	18:00～		
被害者年代	10代	度数	64 ***	7	28 ***	99
		全体に占める割合	31.84%	3.48%	13.93%	49.3%
		調整済み標準化残差	3.745	0.058	-3.825	
	20代	度数	34 *	4	43 **	81
		全体に占める割合	16.92%	1.99%	21.39%	40.3%
		調整済み標準化残差	-2.160	-0.927	2.668	
	30代	度数	5 *	2	11 +	18
		全体に占める割合	2.49%	1.00%	5.47%	9.0%
		調整済み標準化残差	-2.087	0.724	1.742	
	40代以上	度数	0 +	1 +	2	3
		全体に占める割合	0.00%	0.50%	99.50%	1.5%
		調整済み標準化残差	-1.789	1.808	0.880	
合計	度数	103	14	84	201	
	全体に占める割合	51.24%	6.97%	41.79%	100.0%	
被害者職業	中学・高校生	度数	57 ***	5	19 ***	81
		全体に占める割合	33.14%	2.91%	11.05%	47.09%
		調整済み標準化残差	4.612	0.190	-4.753	
	大学・専門	度数	8 +	3	12	23
		全体に占める割合	4.65%	1.74%	6.98%	13.37%
		調整済み標準化残差	-1.749	1.592	1.015	
	会社員等	度数	18 *	2	29 **	49
		全体に占める割合	10.47%	1.16%	16.86%	28.49%
		調整済み標準化残差	-2.486	-0.613	2.804	
	バイト・派遣	度数	2 +	0	7	9
		全体に占める割合	1.16%	0.00%	4.07%	5.23%
		調整済み標準化残差	-1.821	-0.766	2.203	
	その他	度数	1	0	3	4
		全体に占める割合	0.58%	0.00%	1.74%	2.33%
		調整済み標準化残差	-1.083	-0.503	1.333	
	無職	度数	3	0	3	6
		全体に占める割合	1.74%	0.00%	1.74%	3.49%
		調整済み標準化残差	-0.087	-0.619	0.381	
合計	度数	89	10	73	172	
	全体に占める割合	51.74%	5.81%	42.44%	100.00%	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

3-1-7. 痴漢行為の内容と発生時間帯

痴漢行為の内容と発生時間帯についてのクロス集計表をTable 14に示し、 χ^2 検定を行った ($\chi^2(18) = 27.880, p < .10, \text{Cramer's } V = .297$)。残差分析の結果より、太ももを触る行為は始発～9:59の時間帯に少なく、18:00～終電の時間帯に多かった。胸を触る行為は10:00～17:59の時間帯に多かった。

Table 14 痴漢行為の内容と発生時間帯

		時間帯			合計	
		～9:59	10:00～17:59	18:00～		
痴 漢 行 為	下半身	度数	22	1 +	15	38
		全体に占める割合	13.92%	0.63%	9.49%	24.05%
		調整済み標準化残差	1.296	-1.204	-0.688	
	尻	度数	20	0	13	33
		全体に占める割合	12.66%	0.00%	8.23%	20.89%
		調整済み標準化残差	1.534	-1.767	-0.638	
	太もも	度数	5 **	3	14 *	22
		全体に占める割合	3.16%	1.90%	8.86%	13.92%
		調整済み標準化残差	-2.630	1.326	1.968	
	脚・膝	度数	6	0	3	9
		全体に占める割合	3.80%	0.00%	1.90%	5.70%
		調整済み標準化残差	1.108	-0.845	-0.682	
	腹部・腰	度数	3	0	3	6
		全体に占める割合	1.90%	0.00%	1.90%	3.80%
		調整済み標準化残差	0.063	-0.683	0.286	
	胸	度数	3 +	3 *	7	13
		全体に占める割合	1.90%	1.90%	4.43%	8.23%
		調整済み標準化残差	-1.932	2.383	0.723	
腕・手	度数	1	0	1	2	
	全体に占める割合	0.63%	0.00%	0.63%	1.27%	
	調整済み標準化残差	0.036	-0.389	0.163		
スカートに手を入れる	度数	5	0	3	8	
	全体に占める割合	3.16%	0.00%	1.90%	5.06%	
	調整済み標準化残差	0.799	-0.794	-0.398		
押し付け	度数	1 +	1	5	7	
	全体に占める割合	0.63%	0.63%	3.16%	4.43%	
	調整済み標準化残差	-1.865	0.779	1.478		
複数行為	度数	11	3	6	20	
	全体に占める割合	6.96%	1.90%	3.80%	12.66%	
	調整済み標準化残差	0.600	1.511	-1.378		
合計	度数	77	11	70	158	
	全体に占める割合	48.73%	6.96%	44.30%	100.00%	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

3-2. 被害の分類

詳細な情報の記載された新聞記事208件の事件について、加害者及び被害者の年代・職業、被害発生日時、被害内容の変数を対象として多重対応分析を実施した (Figure 1)。分析にはHAD (清水, 2016) を用いた。痴漢行為の内容について、同一の事件で複数の痴漢行為を行ったものは「複数行為」とまとめた。また、痴漢の発生日の曜日について、「平日」と「土日祝」の2つに分けて分析を行った。プロットの「◇」の形は痴漢行為の発生日時、「△」の形は加害者の年代や職業、「○」の形は被害者の年代や職業、「×」の形は痴漢行為の内容に関する変数を表す。第1次元については、上部に「昼・夕」や「土日祝」といった

比較的電車の混雑しない状況の時間帯や曜日の変数がプロットされており，下部には「平日」や「朝」といった電車の混雑する曜日や時間帯に関する変数がプロットされていることから，「電車の混雑具合」を示す軸であると解釈した。第2次元については，右方に被害者の「10代」や「中高生」，左方に被害者の「30代」や「40代～」がプロットされていることから，「被害者の年代」を示す軸であると解釈した。各次元の固有値，相関係数，寄与率，累積寄与率について Table 15 に示した。各変数についてWard法によるクラスター分析を行った結果，比較的空いている車内で発生する「非混雑型」の痴漢行為と，ラッシュ時に混雑した車内で発生する「混雑型」の痴漢行為に分類された。

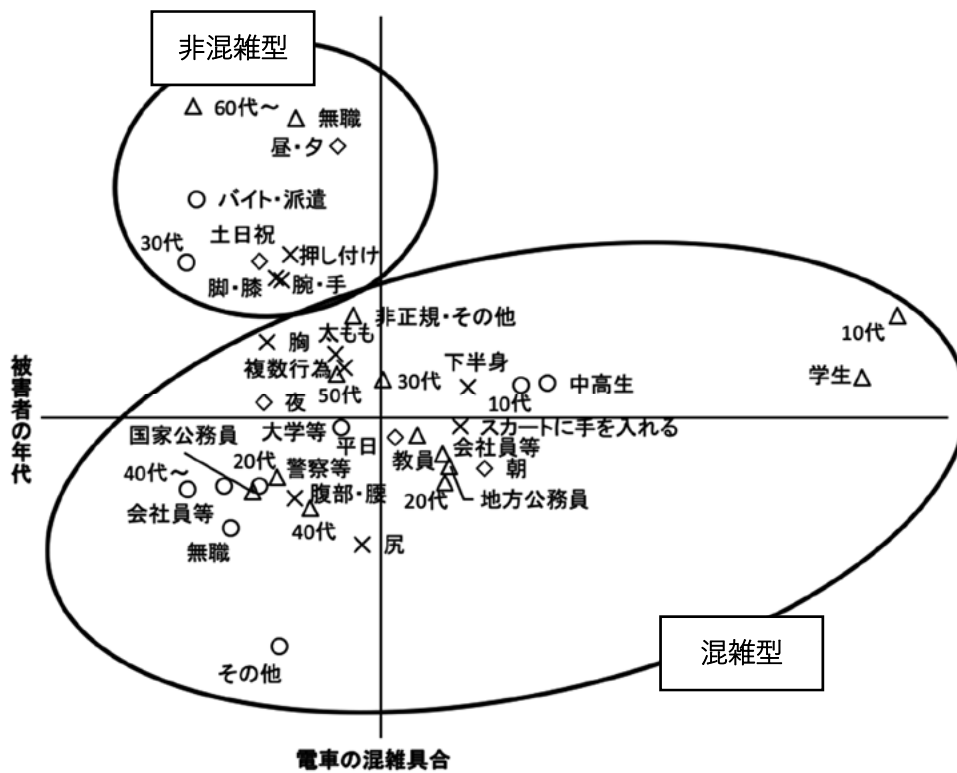


Figure 1 多重対応分析結果

Table 15 多重対応分析の各次元の詳細

次元	固有値	相関係数	寄与率	累積寄与率
電車の混雑具合	.382	.618	.080	.080
被害者の年代	.267	.517	.056	.137

収集された208件の事件のサンプル・プロットをFigure 2に示した。クラスター分析(Ward法)によって208件の事件サンプルを分類した結果，「混雑型」に該当する事件は111件，「非混雑型」に該当する事件は97件であった。それぞれのタイプごとの事件内容の集計

結果をTable 16から Table 21に示した。「混雑型」の特徴として、加害者の年代や職業は10代、学生、無職が多く、40代、警察等や国家公務員といった職業が少なかった。被害者の年代や職業について、10代の中学生や高校生が多く、20代や会社員等、その他の有職者や無職は少なかった。発生時間帯は朝の通勤通学ラッシュや昼から夕方にかけての時間帯に多く、夜の帰宅時間帯には少なかった。痴漢行為の内容は、下半身を触る行為やスカートに手を入れる行為が多く、尻や脚・膝を触る行為は少なかった。「非混雑型」の特徴として、加害者は40代、警察等や国家公務員の職業が多く、10代、学生、無職が少なかった。被害者は、20代や会社員等、その他の有職者や無職が多く、10代の中学生や高校生は少なかった。発生時間帯は夜の帰宅時間帯に多く、朝の通勤・通学ラッシュや昼から夕方にかけての時間帯では少なかった。痴漢行為の内容としては、尻や脚・膝を触る行為が多く、下半身を触る行為、スカートに手を入れる行為は少なかった。

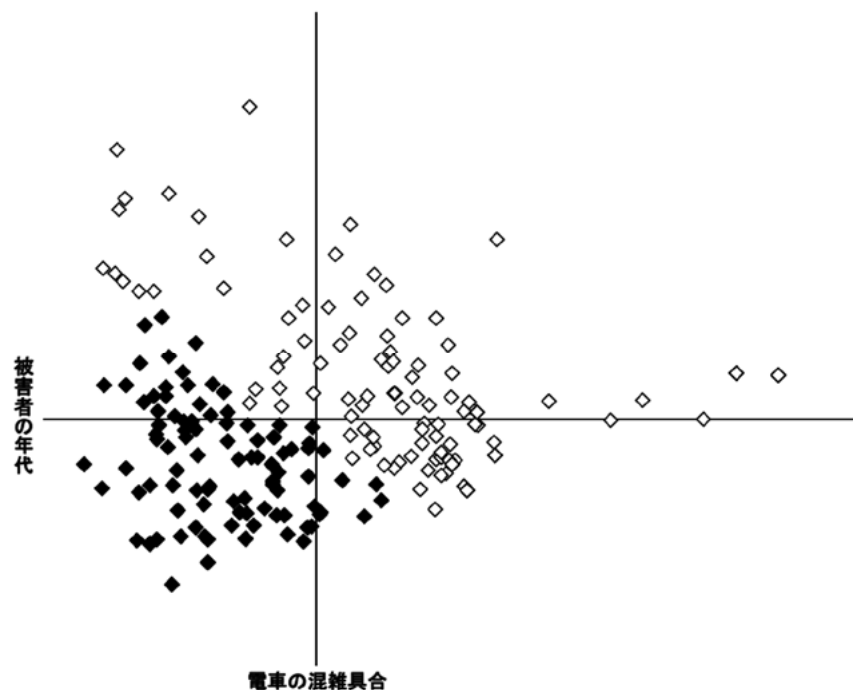


Figure 2 事件のサンプル・プロット

(◇のプロットは「混雑型」の事件を、◆のプロットは「非混雑型」の事件を表す)

Table 16 タイプ別の加害者の年代

		加害者年代						合計	
		10代	20代	30代	40代	50代	60代以上		
痴漢のタイプ	混雑型	度数	8 **	20	35	19 **	24	5	111
		全体に占める割合	3.85%	9.62%	16.83%	9.13%	11.54%	2.40%	53.37%
		調整済み標準化残差	2.696	-0.100	0.255	-2.961	1.338	0.975	
タイプ	非混雑型	度数	0 **	18	29	34 **	14	2	97
		全体に占める割合	0.00%	8.65%	13.94%	16.35%	6.73%	0.96%	46.63%
		調整済み標準化残差	-2.696	0.100	-0.255	2.961	-1.338	-0.975	
合計	度数	8	38	64	53	38	7	208	
	全体に占める割合	3.85%	18.27%	30.77%	25.48%	18.27%	3.37%	100.00%	

***p < .001, **p < .01, *p < .05, +p < .10

Table 17 タイプ別の加害者の職業

		加害者職業								合計	
		警察等	国家公務員	地方公務員	教員	会社員等	その他	学生	無職		
痴漢のタイプ	混雑型	度数	9 ***	6 **	17	9	33	13	9 **	12 **	108
		全体に占める割合	4.43%	2.96%	8.37%	4.43%	16.26%	6.40%	4.43%	5.91%	53.20%
		調整済み標準化残差	-4.777	-2.949	1.584	0.861	1.903	0.339	2.878	2.527	
タイプ	非混雑型	度数	34 ***	18 **	8	5	18	10	0 **	2 **	95
		全体に占める割合	16.75%	8.87%	3.94%	2.46%	8.87%	4.93%	0.00%	0.99%	46.80%
		調整済み標準化残差	4.777	2.949	-1.584	-0.861	-1.903	-0.339	-2.878	-2.527	
合計	度数	43	24	25	14	51	23	9	14	203	
	全体に占める割合	21.18%	11.82%	12.32%	6.90%	25.12%	11.33%	4.43%	6.90%	100.00%	

***p < .001, **p < .01, *p < .05, +p < .10

Table 18 タイプ別の被害者の年代

		被害者年代					合計
		10代	20代	30代	40代以上		
痴漢のタイプ	混雑型	度数	90 ***	11 ***	9	0	110
		全体に占める割合	44.33%	5.42%	4.43%	0.00%	54.19%
		調整済み標準化残差	10.091	-9.598	-0.373	-1.898	
タイプ	非混雑型	度数	10 ***	71 ***	9	3	93
		全体に占める割合	4.93%	34.98%	4.43%	1.48%	45.81%
		調整済み標準化残差	-10.091	9.598	0.373	1.898	
合計	度数	100	82	18	3	203	
	全体に占める割合	0.49	0.40	0.09	0.01	100%	

***p < .001, **p < .01, *p < .05, +p < .10

Table 19 タイプ別の被害者の職業

		被害者職業						合計	
		中学・高校生	大学・専門	会社員等	バイト・派遣	その他	無職		
痴漢のタイプ	混雑型	度数	78 ***	9 +	4 ***	6	0 *	0 **	97
		全体に占める割合	45.09%	5.20%	2.31%	3.47%	0.00%	0.00%	56.07%
		調整済み標準化残差	9.825	-1.758	-7.981	0.658	-2.286	-2.817	
タイプ	非混雑型	度数	4 ***	14 +	45 ***	3	4 *	6 **	76
		全体に占める割合	2.31%	8.09%	26.01%	1.73%	2.31%	3.47%	43.93%
		調整済み標準化残差	-9.825	1.758	7.981	-0.658	2.286	2.817	
合計	度数	82	23	49	9	4	6	173	
	全体に占める割合	47.40%	13.29%	28.32%	5.20%	2.31%	3.47%	100.00%	

**p < .001, *p < .01, +p < .05, +p < .10

Table 20 タイプ別の犯行時間帯

		時間帯			合計	
		～9:59	10:00～17:59	18:00～		
痴漢のタイプ	混雑型	度数 全体に占める割合	68 *** 33.01%	12 * 5.83%	30 *** 14.56%	110 53.40%
		調整済み標準化残差	3.334	2.511	-4.653	
	非混雑型	度数 全体に占める割合	37 *** 17.96%	2 * 0.97%	57 *** 27.67%	96 46.60%
		調整済み標準化残差	-0.033	-2.511	4.653	
	合計	度数 全体に占める割合	105 50.97%	14 6.80%	87 42.23%	206 100.00%

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 21 タイプ別の痴漢行為の内容

		痴漢行為										合計	
		下半身	尻	太もも	脚・膝	腹部・腰	胸	腕・手	スカートに 手を入れる	押し付け	複数行為		
痴漢のタイプ	混雑型	度数	28 *	12 *	12	2 *	4	7	0	7 +	5	11	88
		全体に占める割合	17.72%	7.59%	7.59%	1.27%	2.53%	4.43%	0.00%	4.43%	3.16%	6.96%	55.70%
		調整済み標準化残差	2.561	-2.514	-0.117	-2.082	0.552	-0.140	-1.596	1.859	0.857	-0.067	
	非混雑型	度数	10 *	21 *	10	7 *	2	6	2	1 +	2	9	70
		全体に占める割合	6.33%	13.29%	6.33%	4.43%	1.27%	3.80%	1.27%	0.63%	1.27%	5.70%	44.30%
		調整済み標準化残差	-2.561	2.514	0.117	2.082	-0.552	0.140	1.596	-1.859	-0.857	0.067	
	合計	度数	38	33	22	9	6	13	2	8	7	20	158
		全体に占める割合	24.05%	20.89%	13.92%	5.70%	3.80%	8.23%	1.27%	5.06%	4.43%	12.66%	100.00%

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4. 考察

本研究では、電車内痴漢事件に関する新聞記事を収集して事件内容の分析を行った。単純集計の結果より、加害者の年代は30代が最も多く、次いで40代、次に20代と50代が同程度の割合で多かった。橋本他 (2016) によると、都道府県の条例違反（痴漢行為）で検挙された被疑者 (314名) のうち、29歳以下が15.9%、30～39歳が32.8%、40～49歳が27.7%、50～64歳が20.1%、65歳以上が3.5%であった。この報告と比較すると、本研究の結果の方が29歳以下（10代～20代）の若年層の占める割合が少し高いが、年齢層の分布はほとんど同じであった。加害者の職業について、橋本他 (2016) では、有職者の割合が70.4%、無職者が28.0%、学生が1.6%であった。本研究の結果では職業を細分化して分析したが、加害者の職業が無記載であったり不詳であったものを除いて再計算した際の加害者の有職者率（派遣社員やアルバイトも含む）は95.8%であり、学生の割合は4.7%、無職者の割合は2.6%であった。この報告と比較すると、本研究の結果の方が有職者や学生の割合が高く、無職者の割合が低かった。痴漢行為をはじめとする性犯罪の多くが新聞報道される場合の多くは、被疑者が逮捕された時点や、逮捕を理由に懲戒免職を受けるなどした時点である。橋本他 (2016) の統計の対象となっているのは裁判を経て有罪の判決を下された後の者である。被疑者が初犯であったり、正規雇用されており安定した収入がある場合など、警察の捜査を経て逮捕されても、被害者との示談が成立し、検挙には至らないケースもある。本研究で扱った新聞記事の事件についても、このようなケースの加害者が多く、検挙まで至っていない者が多く、法務省の

公表するデータの分布との差異が生じている可能性が考えられる。また、池間 (2017) では児童ポルノ禁止法違反で有罪判決が確定した事件の新聞記事を分析しているが、加害者の職業は学校関係者が43.1%、が高関係者以外の公務員が15.5%を占め、全体の6割近くが公務員の加害者であった。児童ポルノ事案と同様、電車内痴漢事件に関しても新聞で報道された事件の加害者の半数以上が公務員であった。これは、電車内痴漢事件や児童ポルノ事案などの報道にあたって、逮捕された加害者の勤務先から事件が公表されるケースが多いこと、加害者の職業がそれほど社会的注目を集めない場合には報道されにくいことが影響していると考えられる。

被害者については、10代が約半数、20代が約4割を占め、若い女性に被害が集中していることが示された。職業については中学生や高校生が半数近くを占めることも年代の割合とおおよそ合致する。桐生他 (2019) は学校教員によるセクシャルハラスメント、痴漢、買春などの性的逸脱行動を報道した新聞記事について分析しており、その被害者は高校生が最も多く、中学生、小学生と続いた。池間 (2017) の児童ポルノ事犯の分析においては、被害者の27.6%が中学生、24.1%が高校生、小学生以下は10.3%であった。本研究で対象とした痴漢事件は電車内で発生したもののみを対象としており、小学生以下の被害者の割合は0%であった。菊池他 (2009) では、警察が認知した強制わいせつ、準強制わいせつ、強姦事件のうち、公共の屋外空間で発生した事件（電車内や住居で発生した事件は除く）について分析している。これらの事件の被害者は高校生が54.8%と最も多く、中学生は15.4%、小学生は18.2%であった。児童・生徒を対象とした性犯罪でも、罪種によって被害者の年齢層が異なる傾向があることが示唆される。

痴漢行為の内容については、「下半身を触られる」という内容が最も多かった。しかし、本研究で扱った新聞において被害内容を報道する際、「下半身」という表現について、腰の下から足先までの部位についてまとめて「下半身」という言葉で表しているものか、「陰部」や「局部」といった直接的な表現を避けるために「下半身」という言葉で表現されたものであるのかは不明である。「下半身」以外の被害では、「尻」が38件と最も多く、「太もも」25件、「胸」20件と続いた。「下半身」以外について考察すると、大高 (2017) において大学生に被害経験を聴取した結果は、「臀部」が最も多い点は一致していたが、以降は「押しつけ」、「脚」、「胸部」と続いていた。「脚を触られる」「体を押しつけられる」といった被害は、被害経験の聴取では度数が高く、新聞記事の分析では度数が低い。これらの被害は暗数化しやすいと考えることができる。

電車内痴漢の発生日時について、全体の約9割が月曜日から金曜日までの平日に発生しており、土曜日や日曜日の発生は全体の約1割であった。時間帯については、通勤・通学ラッシュの朝の時間帯が半数強、帰宅ラッシュの夜の時間帯が4割強であったが、土曜日や日曜日では朝の時間帯の発生が少なく、昼～夕方や夜の時間帯の発生が多かった。仕事や学校が

休みであることの多い土日では、朝の時間帯の電車がかなり空いていること、平日と比較すると昼～夕方の利用率が高いことによる違いであると考察できる。しかし、鈴木(2000)や岡部(2005)などの被害者に対する調査にて、被害届を提出しなかった理由として「時間に余裕がないから」といった理由が多いことを踏まえると、帰宅中の夜の被害と比較して、通勤・通学中の朝の被害は仕事や学校に遅刻することを恐れ、被害の報告率は低いと考えられる。このことを踏まえると、実際の朝の時間帯の被害の占める割合はこの結果よりも多いことが予想される。

電車内痴漢の加害者と犯行日時について、10代の加害者は朝の犯行が多く、夜の犯行が少なかった。30代は昼～夕方の時間帯の犯行が多く、60代以上は朝の犯行が少なかった。10代の加害者には学生が多く、昼以降の時間帯よりも朝の時間帯によく電車を利用するためであると考えられる。60代以上の加害者に朝の時間帯の犯行が少ないことは、定年後の加害者が多く、朝の通勤ラッシュの時間帯に電車を利用することが少ないためであると考えられる。加害者の職業と時間帯では、警察等の加害者は朝の犯行が少なく、夜の犯行が多かった。地方公務員の加害者では朝の犯行が多かった。無職の加害者は朝の犯行が少なく、昼～夕方の時間帯の犯行が多かった。「警察等」には、警察官のほか、消防署員や自衛官の加害者も含まれており、これらの職業はその他の公務員や多くの会社員と異なり、勤務体系が多様であるために、必ずしも朝のラッシュ時間帯に通勤するとは限らないことが要因の一つとして考えられる。無職の加害者は、多くの人が勤務中である昼や夕方にも電車に乗ることができるため、他の有職者の犯行の少ない時間帯で比較的犯行率が多くなったものと考えられる。

電車内痴漢の被害者と被害時間帯について、10代の中学生や高校生の被害者は朝の被害が多く、夜の被害が少なかった。20代や30代、会社員等の被害者では朝の被害が少なく、夜の被害が多かった。10代の中高生は、部活や塾、アルバイトなどで帰りが遅くなる日を除けば、会社員等の女性と比較して、帰宅ラッシュの時間帯に電車に乗る機会が少ないこと、また、帰宅時には友人らと一緒に電車に乗って帰宅する機会が多いことから、朝の時間帯に被害が多くなるものと考えられる。成人の会社員等の女性の被害については、中高生の被害が朝に集中するために、比較的夜の時間帯の被害が有意に多くなるものと考察できる。

多重対応分析及びクラスター分析による電車内痴漢事件の分類の結果、「非混雑型」の痴漢行為と「混雑型」の痴漢行為に分類できた。「混雑型」の加害者には10代、学生、無職の者が、被害者には10代の中学生や高校生が多く、朝の通勤通学ラッシュや昼から夕方にかけての時間帯に多く発生し、下半身を触る行為やスカートに手を入れる行為が多かった。「非混雑型」の加害者には40代、警察等や国家公務員の者が多く、被害者には20代、会社員等、その他の有職者や無職の者が多く、夜の帰宅時間帯に多く発生し、尻や脚・膝を触る行為が多かった。多重対応分析の変数のプロットで「混雑型」に分類された特徴のうち、事件のサンプル・プロットでは「非混雑型」に分類される特徴があることについて、土日や昼間の発

生件数はかなり少ないこと、18時以降の時間帯は朝のラッシュ時ほどには電車が混雑しない場合も多いことが要因であると考えられる。国土交通省 (2018) の平均混雑率は、1日の中で最も混雑している1時間の平均の混雑度を算出したものであるが、掲載されている全ての区間において朝の時間帯が最も混雑しており、そのほとんどがおおよそ7:30~8:30前後の1時間であった。痴漢の分類を行った先行研究として、大高他 (2015) は電車内に限定しない痴漢被害の分類を行い、「車両混雑型」、「座席上型」、「夜道型」の3つに分類していた。「夜道型」は暗く人通りの少ない深夜の路上で発生するタイプであるが、「車両混雑型」と「座席上型」は電車内で発生するタイプである。「車両混雑型」は電車の混雑する時間帯に発生し、「座席上型」は混雑度に関係なく座席上で発生する。電車内が混雑していればなかなか座席に座ることはできないため、上述の「座席上型」の被害も実際には電車の空いている時に座席に座れた際に発生しているものであると考えられる。本研究の「混雑型」は大高他 (2015) の「車両混雑型」と、「非混雑型」は「座席上型」と同様の特徴を持ったタイプであると言える。

本研究の結果より、「混雑型」の痴漢は中学生や高校生の女子生徒の被害者が多く、「非混雑型」の痴漢は会社員等の成人女性の被害者が多い。Guay, et al. (2001) は連続性犯罪者について、初めての犯行で子どもへ加害した犯人はその後の犯行でも被害者に子どもを選び、成人女性へ加害した犯人は成人女性を選ぶ傾向があることを示した。Prentky, et al. (1997) によると、子供に対して性犯罪を犯した115人の犯人のうち、平均3~4年の調査期間内に37人が性犯罪の再犯を犯していた。また、橋本他 (2016) によると、痴漢型の性犯罪者には、複数回の刑事罰を受けているにもかかわらず、痴漢行為を繰り返している者が多い。このように再犯率の高い痴漢の犯人もGuay, et al. (2001) の連続性犯罪者と同様に同じ年代の被害者を選ぶとすれば、中学生や高校生の女子生徒を好んで痴漢する犯人と、20代の会社員などの若い成人女性を好んで痴漢する犯人が存在することが考えられる。牧野 (2019) によると、インターネットの検索エンジンやネットショッピングのサイトで「痴漢」と検索すると、痴漢を題材としたアダルトコンテンツや性風俗店の情報が数多くヒットする。また、アダルトコンテンツではない男性向けの週刊誌等でも、痴漢が題材として取り扱われる際、痴漢のしやすい路線の情報が掲載されたり、痴漢をした男性や痴漢の被害にあった女性の体験談が性的コンテンツとして消費されてきた。Malamuth & Check (1981) は、女性に対する暴力を描いた映像を見せた場合、男性においては統制群と比較して女性に対する暴力への容認傾向が高かった。このようなメディアを通して、アダルトコンテンツとして「痴漢」の情報に触れると、女性に対する暴力の映像と同様に、女性に対して痴漢することへの容認が高まることが考えられる。痴漢の発生要因について、加害者側の心理的背景の検討も必要である。

本研究では、東京新聞と中京新聞のデータベースを利用し、電車内痴漢に関する新聞記事の内容について、単純集計を中心に分析を試みた。1995年から2020年7月までの事件を収集したが、十分な概要を得られる記事は208件しか収集できなかった。多重対応分析の次元の

累積寄与率も13.7%と高くない。東京新聞は主に首都圏、中日新聞は主に中京圏の事件を掲載する地方新聞である。今回は、著者がアクセス可能なデータベースを用いて分析したものであり、得られた結果はあくまでも限定されたものである。今後は、全国紙に掲載された電車内痴漢事件や、関西圏やその他の地方紙の記事も収集することにより、分析対象の事件数を増やした検討、さらには地域差についても検討できることが期待される。

引用文件

- Guay, J. P., Proulx, J., Cusson, M. & Ouimet, M. (2001). Victim-Choice Polymorpha Among Serious Sex Offenders. *Archives of Sexual Behavior*, 30(5), 521-533.
- 橋本洋子・村上綾子・杉本浩起・高橋哲・竹下賀子・只野智弘・吉永浩幸・西原舞・瀧澤千都子・岡田和也・松田芳政・浅野貴司・小谷久実子 (2016). 性犯罪に関する総合的研究 法務省総合研究所研究部報告, 55.
 〈http://www.moj.go.jp/housouken/housouken03_00084.html〉
- 原田隆之 (2019). 痴漢外来－性犯罪と闘う科学 ちくま新書
- 池間愛梨 (2017). 近年の日本における児童ポルノ事犯の発生状況と防犯対策 東洋大学大学院紀要, 54, 105-119.
- 岩井茂樹 (2017). 世界「痴漢」発見 日本語・日本文化, 44, 31-52.
- 警視庁(2020). 安全な暮らし 被害にあわないために 性犯罪から身を守る こんな時間、場所がねられる
 〈<https://www.keishicho.metro.tokyo.jp/kurashi/higai/koramu2/koramu8.html>〉
- 菊池城治・雨宮護・島田貴仁・齊藤知範・原田豊 (2009). 声かけなどの不審者遭遇情報と性犯罪の時空間的近接性の分析 犯罪社会学研究, 34, 151-163.
- 桐生正幸・大高実奈・田楊・高橋綾子・山口雄人 (2019). 学校教員による性的逸脱行動の分析 東洋大学社会学部紀要, 57 (2), 75-80.
- 国土交通省 (2004). 平成22年 第11回大都市交通センサス 調査結果概要
 〈<https://www.mlit.go.jp/common/000206133.pdf>〉
- 国土交通省 (2018). 東京圏で混雑率180%超の路線が12路線から11路線へ ～都市鉄道の混雑率調査結果を公表します～
 〈https://www.mlit.go.jp/report/press/tetsudo04_hh_000068.html〉
- 交通政策審議会 (2016). 東京圏における高速鉄道を中心とする交通網の整備に関する基本計画について (答申) 2018年4月20日
 〈<https://www.mlit.go.jp/common/001138591.pdf>〉
- Malamuth, N. N. & Check, J. V. P. (1981). The effect of mass media exposure on acceptance of violence against women: A field experiment. *Journal of research in personality*, 15,

436-446.

牧野雅子 (2019). 痴漢とはなにか 被害と冤罪をめぐる社会学 エトセトラブックス

岡部千鶴 (2004). 女性専用車両に関する一考察 ～痴漢被害の実態とともに～ 久留米信愛女学院短期大学研究紀要, 27, 57-66.

大高実奈・喜入暁・越智啓太 (2015). 制服のスカート丈は痴漢被害を予測するか—痴漢被害の類型および被害と露出度の関連の検討— 日本心理学会第79回大会発表論文集, 486.

大高実奈 (2017). 男女大学生における電車内痴漢被害の実態調査 東洋大学大学院紀要, 54, 65-76.

大阪府警察 (2020a). 生活安全 子どもや女性を守るために 性犯罪の発生状況令和元年中の性犯罪の発生状況

〈<https://www.police.pref.osaka.lg.jp/sodan/sodan/1/1/4535.html>〉

大阪府警察 (2020b). 相談窓口 各種相談窓口 列車内ちかん被害相談 列車内ちかんQ&A 列車内ちかんQ&A Q1

〈<https://www.police.pref.osaka.lg.jp/sodan/sodan/1/1/4535.html>〉

Prentky, R. A., Knight, R. A. & Lee, A. F. S. (1997). Child Sexual Molestation: Research Issues. *National Criminal Justice Reference Service*.

清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.

鈴木眞悟 (2000). 若年女性における痴漢被害の実態 科学警察研究所報告 防犯少年編, 40(2), 137-145.

遠山日出也 (2018). 中国の公共交通機関における性暴力反対運動と女性専用車両—香港・台湾・日本との初歩的比較も— 女性学年報, 39, 21-39.

運送政策審議会 (2000). 東京圏における今後の都市鉄道のあり方について (答申)

〈https://www.mlit.go.jp/kisha/oldmot/kisha00/koho00/tosin/kotumo/mokuji_.htm〉

新聞データベース

中日新聞・東京新聞記事データベース

〈<https://ace-cnc-ne-jp.stri.toyo.ac.jp/clip/GU200>〉

Classification of train molestations and their characteristics

-An exploratory analysis using newspaper reports-

OHTAKA, Mina

Abstract:

In this study, 208 newspaper articles on train molestation cases were collected and analyzed. Simple analysis revealed that most of the perpetrators were male civil servants and most of the victims were junior high school and high school girls. Most of the incidents occurred during the morning and evening hours on weekdays. As a result of the multiple correspondence analysis and cluster analysis, the cases were classified into two types: "congestion-type" molestations, which occurred during congested train rush hours such as weekdays and mornings, and "non-congestion-type" molestations, which occurred when trains were not congested. The "congestion-type" molestations often occurred during the morning rush hours, and many of the victims were junior high school students and high school students. The "non-congestion-type" molestations often occurred in the evening rush hour, and many of the perpetrators were male public servants such as policemen and national public servants in their 40s, and most of the victims were office worker women or unemployed women in their 20s.